

実践紹介 1 埼玉県立小川高校

# 地域を「活かす」学びを 各教科の授業で展開し、 探究を深める

地域にかかわる多様な立場のメンバーで、カリキュラムを構築

埼玉県立小川高校は、2019年度、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定を受け、町内の小・中学校とともに、地域資源を活用した探究学習「おがわ学」をスタートさせた。事業指定初年度に、埼玉県教育委員会、小川町政策推進課、同町教育委員会、同町立小・中学校、高校（同校）、PTA、地域住民、産業・観光・文化団体の代表者、学校地域連携コーディネーターなどから成るコンソーシアムを組織し、「おがわ

学」で育成を目指す児童・生徒の姿を「自ら課題を発見し、深く考え、主体的に判断することができ、児童・生徒」などの3つに設定。その達成に向け、小学校は小川町について「知る」、中学校は「学ぶ」、高校は「活かす」と、発達段階に応じた内容とし、地域課題に取り組み上で必要な資質・能力を12年間で体系的に育成するカリキュラムとした。

同校では、校内の「おがわ学」の推進や校外の調整を担う「地域連携委員会」を立ち上げ、具体的な授業づくりは各教科会で検討を進めた。その際に議論になったのが、高校が担う「活かす」学び

図 「おがわ学」の主な授業

1年次	現代社会	小川町の人口や産業、交通など、町の状況を把握し、町の行政について調べ、町に必要な施策を検討する。
	生物基礎	町の自然環境について様々な条件で調べ、外来生物（植物）の繁殖とも比較しながら、町の課題を探る。
	地理A・コミュニケーション英語I・情報	「地理A」で町について調べ、テーマ別マップを作成。「コミュニケーション英語I」で、観光名所を説明する英文を作り、「情報」でそれらを統合した英語版の観光案内地図を作成する。
2年次	世界史A・B	記録媒体の歴史を学ぶ単元で、地域の和紙作家から、ユネスコ無形文化遺産に登録された和紙について学ぶ。
	古典B	町内に点在する『万葉集』の歌碑を巡り、『万葉集注釈』と照合しながら、和歌の意味や背景を調べる。
3年次	家庭基礎	地域の有機農家から、地産地消や町で栽培される食材について学び、それらを使用した料理を通じて、食について考える。
	総合的な探究の時間	和紙や万葉集などの地域資源を生かした町づくりについて、テーマごとに12の講座に分かれ、グループでフィールドワークなどを行いながら探究を深めていく。

※学校資料を基に編集部で作成。

## 事前に授業の目的や展開を 地域人材と綿密に打ち合わせ

に向けて、生徒が地域課題を見つけ、具体的な取り組みを考えると、この授業をどのように展開するか、そして、地域人材がどのように生徒にかかわればよいかわからない。進路指導主事の谷野浩人先生は、次のように説明する。

「地域の自然や産業などを題材にした授業では、町外出身の生徒には得るものがないと思われるがちですが、目的は探究学習であり、町は題材の1つです。その点をまづは教師自身が理解し、地域人材にも伝えて、指導案を練りました」

事業指定2年目から、教科の授業や「総合的な探究の時間」、LHRで本格的に「おがわ学」を実施している（図）。授業に招く地域人材には、事前の打ち合わせで、自身の体験の中で生徒が関心を持ちそうな話題、生徒に考えさせたい題材に絞って話してもらいように依頼。生徒が授業後に取り組み振り返りシートを渡し、授業のゴールを共有する場合もある。



**新井和弘**  
学校地域連携  
コーディネーター  
あらい・かずひろ  
コーディネーター1年目



**山野龍太郎**  
地域連携副委員長  
やまの・りゅうたろう  
教職歴10年。同校に赴任し  
て3年目。国語科。



**花輪恵**  
地域連携委員長  
はなわ・めぐみ  
教職歴25年。同校に赴任し  
て5年目。地理歴史科。



**谷野浩人**  
進路指導主事  
やの・ひろと  
教職歴30年。同校に赴任し  
て7年目。英語科。



**篠田俊文**  
教頭  
しのだ・としふみ  
教職歴22年。同校に赴任し  
て2年目。



**荻塚雄一**  
校長  
にらづか・ゆういち  
教職歴36年。同校に赴任し  
て4年目。

さらに、生徒自身が題材について考え、気づきを得られる時間を確保するように授業を設計した。地域連携副委員長の山野龍太郎先生は、次のように語る。

「地域人材に授業の意図を説明した上で、授業で話す内容のレジュメを事前にいただき、その中で重点的に話してほしいことをすり合わせています。地域人材と打ち合わせた内容や授業の展開などは、指導案にして記録に残し、次年度以降、担当者が代わっても継続できるようにしています」

地域人材と学校との最初の調整は、学校地域連携コーディネーターが担う。21年度からコーディネーターを務める新井和弘さんは、前任者が地域を回って人材を発掘し、信頼関係を築いてきたことが重要だったと語る。

「地域の方の多くは、学校教育について詳しく知りません。直接会って『おがわ学』の趣旨を説明する際には、すぐに理解してもらうことを求めず、対話を重ねるようにはしています。また、子どもに教えた経験がないと不安を抱く方には、授業における地域人材の役割や子どもとの接し方などを伝える、不安なく授業に臨んでもらえるようにしています」

授業後には、生徒が書いた振り返りシートを地域人材にも共有し、次の授業づくりに役立てている。

### 地域人材との交流から、自身のあり方・生き方を考える

生徒の学びは、自身のあり方・生き方にも影響を及ぼしている。例えば、2年生の「世界史」の授業で、地元の和紙作家と生徒が一緒に和紙の活用法を考えるワークショップを行った際、生徒が和紙作家に、「なぜ、和紙作家になったのか」と尋ねていたという。地域連携委員長の花輪恵先生は、地域の多様な人との交流がキャリア教育につながっていると語る。

「和紙作家と話し、和紙について深く知るうちに、それを職業に選んだ和紙作家の生き方に関心を持ったのでしよう。『おがわ学』は、生き方を考える探究学習にもなっています」

3年生の「総合的な探究の時間」では、同町の政策推進課から町の現状について説明を受け、問題解決のためのアイデアを出すグループワークを実施。その振り返り

シートには、町の数十年後を見据えて今すべきことを書いた生徒もいた。篠田俊文教頭は、「おがわ学」の1つの成果が見えたと言語。

「地域の問題に最前線で取り組む町の職員の話や、生徒は真剣に受け止め、解決策を考えていました。そうした体験の積み重ねが、社会に目を向け、よりよい社会を築こうとする志につながると実感しました」

事業指定終了後は学校地域連携コーディネーターの配置が難しいため、21年度は、同町の町づくりを行うNPOとの連携を通じて地域の人脈づくりに努めている。さらに、同町が運営する地域人材バンクに学校の教育資源を登録し、地域と学校が教育資源を活用し合える仕組みを検討中だ。荻塚雄一校長は、今後の展望をこう語る。

「学校には、専門知識を持つ教師や図書室、パソコン室など、様々な教育資源があります。生徒が地域から学ぶだけでなく、学校が地域の教育の場となることで、生徒と地域住民が高め合う、真の地域連携を目指していきます」